

**第8回京都市総合計画審議会
議事録**

日 時：令和7年8月29日（金） 15:00～17:00

会 場：京都市役所 4階「正庁の間」

出席者：

1 京都市総合計画審議会委員（五十音順、敬称略）

安保 千秋	弁護士
榊田 隆之	一般社団法人京都経済同友会代表幹事
阪部 すみと	Tsunagary オフィス合同会社最高執行責任者
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
鈴鹿 可奈子	株式会社聖護院八ッ橋総本店代表取締役社長
曾我 謙悟	京都大学公共政策大学院院長
高屋 宏章	社会福祉法人京都市社会福祉協議会会長
貫名 涼	京都大学地球環境学堂助教
濱崎 加奈子	公益財団法人有斐斎弘道館館長／ 京都府立大学農学食科学部准教授
原 敏之	日本労働組合総連合会京都府連合会会長
藤野 敦子	京都産業大学副学長・現代社会学部教授
プラー ポンキワラシン	市民公募委員
堀場 厚	京都商工会議所会頭
牧 紀男	京都大学防災研究所教授
宗田 好史	関西国際大学国際コミュニケーション学部教授／ 京都府立大学名誉教授

2 特別委員

野村 将揮	ハーバード大学デザイン大学院／京都哲学研究所／ Yamauchi No.10 Family Office／京都大学成長戦略本部
-------	--

以上16名

1 開会

司会（都市経営戦略監）

ただ今から、第8回京都市総合計画審議会を開催する。委員の皆様におかれては、大変お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。

本日は、21名中16名の委員に御出席いただいている。審議会は公開とし、報道関係者席を設けるとともに、市民の皆様にも傍聴いただいている。また、本日が最終の審議会であるため、京都市未来共創チーム会議委員にも傍聴いただいている。なお、記録のために録音、録画を行うが、御了承いただきたい。

本日は、「京都基本構想」答申（案）について議論いただきたい。名称について、これまで「京都基本構想（仮称）」としていたが、パブリック・コメントを踏まえ、「（仮称）」を削除し、「京都基本構想」とさせていただく。

2 議事

- （1）「京都基本構想」に係るパブリック・コメントの結果について
- （2）「京都基本構想」答申（案）について

司会（都市経営戦略監）

それでは、ここからの進行については、宗田会長にお願いする。

宗田会長

それでは、ここから私が進行を務めさせていただく。7月14日から8月14日までの32日間、京都基本構想に対するパブリック・コメントを実施してきた。まず、パブリック・コメントの結果について事務局から御説明いただき、その後、野村特別委員からパブリック・コメントの結果などを反映した修正稿について御説明いただきたい。

パブリック・コメントは、584名の方から1,514件の御意見を頂戴した。大変大勢の皆様に関心を持って読んでいただいたことに心から感謝したい。それでは、事務局から御説明をお願いする。

- 事務局から資料2「「京都基本構想」に係るパブリック・コメント結果」について説明

宗田会長

御説明いただいたように、一つ一つをととても丁寧に読んで、その意味を汲んでいただいている。また、より良い表現となるようなアドバイスを積極的にいただいている。本当に心から感謝をしたい。

それでは、起草者でもある野村特別委員から修正内容について伺いたい。よろしく願います。

野村特別委員

私自身も京都市民だが、改めて、パブリック・コメントを御投稿くださった皆様、それからここに至るまでさまざまな御意見を賜った審議会の委員の皆様感謝申し上げます。

私は、元々経済産業省からキャリアを始めているので、パブリック・コメントを実施したことも、審議会を運営したこともあるが、この審議会では個人的にも本当に勉強させてもらえた。大変ありがたく感じている。

先ほど荒木室長から御説明がなかった点を簡単に申し述べたい。修正履歴ありの構想案、1 ページ目の「序文」からである。修正箇所をそれぞれ簡単にお話しすると、まず「人間は、過去に生かされ」のパートだが、こちらは構成を変えただけで文意は変えていない。というのも、続くパート「人間は、自然に生かされ」、最後のパート「人間は、共同体に生かされ」はともに、1 文目は「人間は」を主語に、2 文目は「京都市」を主語に、3 文目は「わたしたち京都市民は」を主語にする構成で全て統一していた。修正の過程で最初のパートのみ齟齬が生じていたので、文章の前後関係を整えた。

1 ページ目に戻っていただき、「人間は、過去に生かされ」のパート。パブリック・コメントでの御指摘を踏まえて、「残存」という表現を「市政の人々の愛着と創意に満ちた日常の尊い軌跡に他ならない」としている。「残存」という表現の適否については理解しつつ、御提案いただいた文化が「発展」という形容は、これまでの市長からのお話でも何度か御言及があったが、ある種の進歩史観、発展史観的なことを含意し得るため、この「日常の尊い軌跡」という表現を採用した。

既に全体を荒木室長に御説明いただいているので、11 ページまで飛びたい。厳密に言うと10 ページの末尾の辺りからだが、「農山村の衰退」に始まることから、地球規模の環境、京都市への影響等々、抜本的に追記している。こちらは、専門家でいらっしゃる貫名委員の御意見を参考にさせていただいた。

審議会の中では言及していなかったなのでこの機に申し上げますと、11 ページ、第四節の2 段落目、「また、21 世紀を迎えてなお……戦後長く培ってきた世界各国からの信頼や敬意に基づく相互理解の深化、ひいては世界平和への貢献余地が年々高まっている」という部分。世に言われるソフトパワー外交、文化や愛着や信頼関係に基づいて世界の平和や課題解決に貢献していこうといった姿勢を書き下している。

この背景には、明示できていなかったなので追記したが、12 ページ、「これに基づく国際政治・国際経済上の力学構造の変化」、すなわち、これからインド・アフリカの人口が圧倒的に増えていく世界において、おそらく京都的な自然観や共同体観、個人観が、例えばインド・アフリカとヨーロッパ・アメリカ、いわゆる先進国等との橋渡し役になり得るだろうということを含意している。この文章全体で、二元論的ではないもの、要素還元主義的ではないものを念頭に置いてきたのも、このような世界貢献への可能性を含意したものであった。なお、この世界貢献への可能性は、世界文化自由都市宣言で描かれている都市

理念にほかならない。

もう数点だけ。15ページ、脚注16が付いている「深い静謐」という表現。これが抽象的すぎるとの御指摘もあったが、あえてこの形容で残している。このほか、「人間性の恢復」や「京都学藝衆」など、今回の修正で脚注を追加したが、このように抽象度が高めの言葉をあえて規定せずに、つまり、意味を狭めることを避けつつ、読み手に解釈を委ねる形で残しているものが複数ある。

未来共創チーム会議の議論に「余白」という言葉があったと聞いている。この基本構想の解釈においても、読み手にとっての余白を残したいという趣旨で、あえてこのようにしている。

続いて19ページ、第五章の冒頭の追記。委員の先生から御指摘がありそのとおりだと思ったのは、第五章全体を通して、「京都市民」なる概念を拡張していこう、多義的な市民性に基づいて今後の京都市の未来をつくっていこう、という文脈で書いたところに対して、実際に市内に住んできた、もしくは生まれ育ってきた京都市民についての記載が薄いとの御指摘があった。その通りと思われたので、この第五章、結びの章の冒頭に追記した。

宗田会長

それでは、ここで松井市長に一言お願いする。

松井市長

改めて、これまでの皆様の御尽力に心から感謝を申し上げる。市長に就任した年に、このような議論をさせていただく場をいただいたのは、歴史の巡り合わせとしか言い様がないもので、ありがたい機会をいただいたと思う。本日が第8回の審議会である。大変御多忙の皆様方にお時間をいただいたことに感謝を申し上げたい。そして、審議会を8回開催させていただき、開催に当たっていろいろな会場をお借りさせていただいたことにも感謝申し上げたい。

また、本日は杉田委員が出席されているほか、未来共創チーム会議の皆様にも傍聴に来ていただいているが、未来共創チームの皆様にも、審議会と同じ回数（8回）議論していただいたことについても感謝申し上げたい。このような形で25年先の構想について、いろいろな立場を超えた若い世代の方々に参画していただき、それを審議会全体として受け止めていただいたことに心から感謝を申し上げたい。

以前の審議会において曾我副会長から、「基本計画の代替ではないのではないか」という非常に本質的な御指摘をいただいた。まさにそのとおりであり、「25年先のものを行政計画として持ち込むのは、必ずしも適切ではない」と申し上げた記憶がある。どちらかといえば、この25年間に大切にすべきまち柄、これまでの京都の成り立ち、今の働き、そして今後の構成を描いたものであり、ある意味では私にとって大変重い宿題でもある。このようなまち柄を保持するような政策を実際に行っているかということ、常に突き付けられているような枠組みの議論だと思っており、そのような議論を任期の初めにしていた

だいことと、様々な御意見をいただいたことに、心から感謝を申し上げます。

先ほど起草者である野村特別委員からもお話があったように、未来共創チーム会議の言う「0.1市民」をどう考えるのか。この基本構想を読んだ時もそれぞれの方々に当事者として受け止めていただき、それぞれがこの基本構想からいろいろな思いを抱き、まちのあり方について関わっていただく一つのきっかけとなるような、大変多くのコメントをいただいた。建設的な御意見をいただいたことに感謝を申し上げますし、先ほどからお話があったように、全体として少し難しい内容ではないかという御意見もいただいている。それはそうだと思う。野村特別委員にも随分御尽力いただいた。市役所の職員も尽力したし、何よりも委員の皆様方に多くの建設的なコメントをいただいたことで随分読みやすくなったと思うが、それでもなお市民の方々から見ると、若干難しい部分は残っていると思う。しかし、その難しい部分を必要以上に噛み砕かず、注釈を加えることによって、世の中の様相自体がシンプルなことばかりではないというものを反映している。未来共創チーム会議からは、「この文章には人格がある」と言っていた。

出前パブリック・コメントと称して、いろいろなところで御議論いただく中で、厳しい意見もいただいたが、非常に京都らしい文章であるとも言っていた。先日、東京で霞ヶ関の中堅課長を中心としたメンバーに御議論いただいた時も、この京都のあり方を議論するうえで、非常に面白い座標軸になっているのではないかと存外理解していただいた。パブリック・コメントにおいて、もちろん厳しい御意見もいただいたが、思ったよりも前向きで、我々以上に文章を読み込んでいただいているようなコメントもあり、非常に感謝している。

委員の皆様におかれても、本当にこれまで真摯に御議論いただいたことに心から感謝をしたい。アメリカと日本を何度も往復しながら、事務局と格闘しながら文章の工夫をしていただいたことについて、起草者である野村特別委員にも感謝を申し上げます。ぜひ、皆様方にも最後に思い残すことなく御議論いただき、最終形として、市民の民主主義の正当な代表者、代理人である京都市会の議員との議論につなげていきたい。どうぞよろしくお願いする。

宗田会長

市長のおっしゃるとおりで、パブリック・コメントを読んでいくと、この抽象的な文章が決して難しいと思われているわけではなく、きちんと御理解いただいた上で、的確にコメントいただいていることが感じられ、市民の皆様の御理解の深さに深い敬意を覚える。また、市長がまち柄とおっしゃったが、これまで理想を語ることはあっても、まち柄というものをこれほど明確に語ったこと、もっと言うと文章にしたことは初めてであり、松井市長のリーダーシップのもとにもあって、ここできちんとまとまっているということは、もちろん野村特別委員のお手柄だが、これを市民と共有できたことが非常に大きいことだろう。

これまで、京都がどうあるべきかという議論には、曖昧模糊としている部分

があった。京都はどうあってほしいか、京都は何を目指すべきかをいろいろ皆様と議論したし、分かっているようで分かっていないところがあったが、まさにここで一つの基準となるような文書にまとめたことは大変うれしいことである。

今申し上げたように、多くの声が答申案に反映されている。先ほど、事務局から御説明があったように、パブリック・コメントでいただいた御意見に対する考え方については、本日の審議を踏まえたうえで、答申までに安保副会長、曾我副会長、事務局とも相談しながら整理するということで、会長である私に御一任いただきたい。

それでは、ここからは委員の皆様にご答申案について御発言いただきたい。まずは、堀場委員に発言をお願いする。

堀場委員

一言で言って、すばらしい出来ではないかと思う。私は2週間ほどアメリカに行っていたので、割とシンプルな世界からこのような文章を今朝読ませていただいて、最初の印象が難しいというのは改めてあったが、やはり品位や品格も一方であると思い、25年先の構想ということであれば、このような文章のレベルは非常に大事だろう。逆に言うと、生成AIにこういった文章を書かせると、もっと簡単な文章でみんなに分かりやすくなるが、そのまま消えていってしまうような気がする。そのような面で、この微妙な攻め方に改めて感心した。これはやはり京都市らしいという印象を受けた。

その中で、特に私が大事だと思うのは、我々は今までの先輩たちのいろいろな努力を享受しているわけで、そのことに対するアプリシエーションをしなければいけないということである。アメリカでも、京都へ行くということをするごく目を輝かして言うが、それは我々がつくったものではなく、先輩たちがつくった文化に対して憧れを持ち、京都に来ているわけである。今の時代に継承している我々は、このことをもっと認識すべきだと思う。例えば、観光客が来たことに対してすぐ文句を言ってしまう。確かにそれは問題なのだが、来てもらっていること自体は先輩たちの努力のおかげであることを考えれば、そう単純に文句を言えない。一方で、課題である側面があることは確かなので、単にネガティブに表現するのではなく、それをどう解決するかというポジティブに表現していくことが大事ではないか。

もう一つは、これほど立派なメディアに対して、私は中高生がこれを紐解いて学んでいくような場を持つべきだと思う。私がなぜ京都に誇りを持っているかというと、以前もお話ししたと思うが、小学校の授業の中ですごく京都のことを勉強したからである。結果的に自分のプライドや、海外に出て行っても絶対に負けないという思いがそこから来ている。小学生を含めてこの文章のままではやはり難しいと思うので、これを読み解いていくような授業などをぜひやっていただき、これが本当に次世代に生きていくようなプログラムをしていたければ良いのではないかと思う。いずれにしても、文章中に出てくる「ほん

もの」ではなく「ほんまもん」という言葉をこれからの京都のキャッチフレーズにしていきたい。

宗田会長

すばらしいコメントをいただいた。それでは、次に貫名委員から特に環境問題に関して御意見をいただきたい。

貫名委員

お伝えしたいことがたくさんあるのだが、環境の分野に絞った方がよいか。

宗田会長

絞らなくても構わないので、よろしくお願いします。

貫名委員

これまで、事務局はじめ、野村特別委員、それから関係者の皆様にはいろいろ意見をして、時には失礼もあったかもしれない。本日は最後なので、いろいろと言わせていただく。冒頭から順番に申し上げると、序文の中で出てくる「響創」という言葉が有識者との議論を踏まえた造語となっているが、調べたところ実は商標登録されていた。調整が済んでいるのであれば問題ないが、かなり注目を浴びてしまう言葉だと思うので確認が必要ではないか。

併せて申し上げると、京都にも多くの外国籍の方が住んでいる状況であり、「他の文化圏・思想圏」というのはかつてほど明確ではない気もするので、表現を変えてもよいかと思う。

次に、序文の後半だけで「数多」と「数多く」という言葉が4回出てくる。意図されているものは構わないが、特に今回の振り仮名が付いたことで改めて読むと気になった。せっかく格調高いので、少し考えても良いかもしれない。「四半世紀」という言葉も全体に多い印象である。

次に、第一章第三節第2段落に「時代の変化が複雑化・加速化」という表現があるが、化けるという字が重複しているので「時代の変化が激しく、かつ、複雑になって」などに修正してはいかか。

次に、第二章第一節の第3段落の「人間と自然の不可分性と一体性」という言葉について、不可分性と一体性が言葉として重複している気がする。おそらく厳密には別の意味だと思うが、この部分では説明し切れないと思う。

次に、第四章冒頭の第1段落に「山鉾を曳く」と出てくるが、以前の審議会でも申し上げたように、少なくとも日常ではなく、地域の見回りとは異なるものであるため、「ハレ」と「ケ」の部分は描き分けた方がよい。また、パブリック・コメントを拝見していると、祇園祭ではなくて鉦鉾の方が代表的だという意見もある。鉦鉾以外にもたくさんある中で例示として祇園祭を出しているわけだが、もう少し配慮して「地域の祭礼の奉仕」のような一般的な言葉に置き換えるのが良いのではないか。

第四章第一節(1)に「学域」という言葉が使われており、大学では学域という言葉を使うが、ここではどういう意味なのか教えていただきたい。それから、もう少し大きい話をさせていただくと、今回の修正によって第四章冒頭の第1段落に「喫茶店と居酒屋で談笑し、画廊や古書店で語らい、銭湯で湯を浴む」という日常の部分を加えていただいているが、大事なのは逆の目線なのかもしれない。以前にも肩書を抜いた京都人という話をしたが、これはお客さんの目線で書いていると思うが、実は京都らしさをつくっているのは喫茶店や居酒屋、画廊、古書店、銭湯を営む人々の方ではないだろうか。他にも、料理人や料理人に食材を卸す人といった人々もいる。学藝衆と言うと、何かトップ層でエリート的だが、実はそうではないところにこそ着目すべきで、わたしたち京都市民がどちらを指すのかということは、考えた方が良さだろう。

第三章第三節の環境に関しては、修正していただき感謝申し上げます。世界から日本、日本から京都とスケールダウンする構成は非常に良いと思う。この文章に入れるのは難しいと思うが贅沢を言うならば、グローバルからスケールダウンすることでは見えない、京都特有のものがたくさんあるはずなので、その部分にも言及していただきたい。例えば、水がキーワードになるような気がする。食に関しても明治以降、井戸水を使わず、疏水、鴨川、雨庭による防災、北陸新幹線なども水が関係している。

次に、第四章第二節(1)について、第三章での問題提起を受けての第四章だと思うが、1文目と2文目の内容がかなり重複しているが、このままで問題ないだろうか。また、かなり抽象度の高い文章になっているが、パブリック・コメントにもあったように人と自然の関係が大事になっている中で、既に取り組んでいる方々が結構いらっしゃる。そのような既にある萌芽のようなものに言及することで、次の25年を応援することができないかと思う。

パブリック・コメントの意見を全て細かく見ることはかなわなかったが、たまたま目に付いた言葉で、「季節感」という言葉がある。私自身も過日、京都市公式noteでも少し申し上げているように、京都を語る上で季節は抜けてはいけないと思うが、一文字も入っていなかった。空間軸のような話はあるが、時間軸の方が京都には必要だと思うので、そういった部分を入れられないだろうか。逆に言うとそのようなことを入れることで、気候変動、激甚気象、地球温暖化対策と言わずに、京都らしい季節感が失われて、日常が失われていっているのでやらないといけないとなる。同じことを言うにしても、何か京都らしい観点から勘所を押さえられるのではないか。

最後に、京都の特長は他に何があるかと考えていたが、一つはいわゆる都市圏と資源を調達する生産地が一体になっているということである。25年前は京北地域が市域に入っていなかったのもそこまではなかったと思うが、合併したことによって変わった。具体的には、例えばチマキザサの再生に私も関わっているが、なぜそれができているかを考えると、京都市という市政の枠組みの中で産地にまで手が届くからである。これは、実は世界的にも珍しく、人口100万人都市はたくさんあるが、おそらく京都くらいしかない。現在、チマ

キザサは京都市民のごみを使って発電した売電益で山の保全に取り組み始めており、全然PRされていないがすばらしい枠組みだと思う。

そのようなことが市域の中でできてしまうということで、ものすごくポテンシャルがあると思う。文章として盛り込むことは難しいかもしれないが、お伝えしておく。

宗田会長

確かに、季節をキーワードとして出せるところがないか、気候との関係で表すことができるかもしれないので検討させていただく。その他の点も丁寧に見ていただき感謝申し上げます。

曽我副会長

京都大学でも出前パブリック・コメントを2回実施していただいた。学生たちは、よく読んで、かなり批判的な意見も出していたが、それも踏まえて反映してくださっていると思っている。

私からは1点だけである。最後の最後までこのようなことを言って申し訳ない。改めて読んでみて、一方では、この文章が25年後になったらパタッと全然違ったものになるということでもないと思う。他方で、もしかしたら、10年後くらいで、もう違ってきているところもあるかもしれないとも思う。「25年後」や「今後四半世紀」という言葉が使われているのかを改めて見ると、序章、第一章、第五章では明示的に出ているが、例えば、第四章ではほとんど出てこない。

恐らく、議論されている委員の皆様も、書かれた野村特別委員もそうかと思うが、具体的に25年後にこうなっているだろうという形はない性質のものかという気もしている。この辺りは改めてこの最後の段階で、この基本構想をどのように今後生かしていくのか、どうしていくものなのかと考える時のイメージとして、25年後という想定にこだわる必要があるのだろうかということが、最後に私が示したい問題である。

この基本構想については、必ずしも25年と限らなくてもよいと思っているが、他方で、今後どうなるかということを明確にきちんと予測して、対応していかなければいけないことは多くある。この基本構想が出た時に、もちろん京都らしいといろいろなところで受け止められるだろうと思うが、私が専門としている自治体の行政という観点から、他の市などから見た場合に、やはり基本計画をなくすと、当然評価もなくなってしまうので、それらなしでどのようにやっていくのかと思われるだろう。計画と評価という形でなくてもよいが、長期的に戦略を立てて見直していく仕組みがなければ、今後やっていけないと思う。

例えば、25年経つと京都の人口は15%減ると予測されているが、そうすると京都市職員も恐らく15%程度減るだろう。人口が減るよりも職員が増えるなどということは想定し難い。しかし、15%職員が減ったからといって、

仕事の量が減るということは絶対にないと思う。むしろ、京都がこのような姿になっていけば、いろいろな形で仕事が増えていくのだと思う。そうした時に、どのように効率的に仕事をやっていくのかということは、計画を立てて対応していかなければいけない。

少し前までは少子化や温暖化がそれほど悪くならないで済むだろうと思っていたことが、そのような楽観的な期待が実現しないことがこの25年で分かった。確実に予測していたとおりに悪くなっていくと世の中は分かっている、人口などの予測はまず外れないだろう。そうした時に、どのように行政として対応していくのか、その新しい仕組みをどのようにつくっていくのかが、この構想には当然入っていないので、そこをぜひ今後は考えていただきたいと最後に申し上げたい。

宗田会長

25年の構想といっても、25年でできること、100年、200年かけてつくっていく最初の25年としてやるべきことなど様々である。あるいはこれからの25年は、もっと早いペースで進んでいく変化が起こるかもしれない。未来のことはどう進むか分からない未知の部分がどうしてもある。しかし、「永遠の都 京都」をどうつくっていくかという議論における理想は、この基本構想にきちんと込められている。そのことと、戦略的に京都市をどう運営していくかということはまた別だということである。

濱崎委員

この議論に関わらせていただき、大変勉強になった。感謝申し上げる。パブリック・コメント期間中に声をかけられることが多く、その中でも非常にうれしかったのが、「理想を語るのはすばらしいことで、まず自分が言いたかったことなのだ。ありがとう。」とやっていただいたことである。このように思ったださるというのは、一つ成功と言ってよいか分からないが良い意見だと思った。

パブリック・コメントを読ませていただくと、市外の方々にも詳しく読んでいただいているのが伝わり、うれしく思った。これは、未来共創チーム会議から提言のあった「0.1市民」ということを私たちがしっかり受け止め、野村特別委員が書いてくださったからだろうと思う。基本構想を読まれた方が京都に対して温かい気持ちを持たれると同時に、鋭い視点も持ったださると思うので、今後は活用の話になると思うが、ますますしっかり考えていかなければいけないと思った。

先ほど季節の話もあったが、本日はちょうど旧暦の七夕であり、400年前の七夕の時の絵を実際に再現してお花を生けるという会に御一緒させていただいた。このような基本構想の議論をしていたがために、私の頭の中ではとても解釈が進むというか、物の見方の解像度が上がったと思っている。文献を読むだけでは見えてこなかったことが、学藝衆と言っていいか分からないが、実

際に自然と接しながら文化を伝承しようとする人の視点で、400年前はどのようにやったのだろうかと思いを馳せながら、実際に生けられた花を見ると、もう一度古い文献を見た時の私の解釈の仕方や物の見方が大きく変わった。これこそが古い資料や文化財の持っている力であると同時に、今を生きて伝えている人たちがいるからこそその文化を伝承するという力だということを学ばせていただいた。

そのような視点も与えてくれるような構想になっているのではないかと思います。作って終わりではなく、私たちも事あるごとに読み返すことで後から意義が開かれていくことがあると思うので、後々の読み込み方なども私たちがもっと示していくことができたらと思う。

今回の修正で「地域企業」というキーワードを2か所入れていただいたが、「地域住民、地域団体、市民団体、地域企業」と並んだがために、地域団体と市民団体を両方書く必要があるのだろうかと思った。もう一つも同じように、「市政協力委員、市民団体、有志団体や地域企業」と並んでいるので、駄目だというわけではないが少し目立ってしまったので、この辺りも見えていただきたい。また、ルビが多くなったことによって印象の違いがこのように出てくるのかと思った。「寺社城」の読み方は「じしゃじょう」で良いのか。どうなのだろうと思ったので、その辺りも御検討いただけたらと思う。

野村特別委員

ちなみに、ルビは多過ぎると思われるか。意図してかなり増やしたのだが、いかがか。

濱崎委員

同じ単語に対しては最初だけで良いのではないかというのが、私の意見である。ただ、途中から読む方もいらっしゃるだろう。

野村特別委員

文章が長いため、初出にふりがなを付けても、読み進めるうちに止まってしまおうかと思われた。

濱崎委員

例えば、「数多」に全てルビが必要なのかということは気になる。ルビがあるから格調が下がるわけではないが、少しぬるいなという印象を持ってしまうのはもったいないと思う。

野村特別委員

印象についてはおっしゃるとおり。検討したい。

藤野委員

私からは3点申し上げたい。第2回審議会だったと記憶しているが、ケアの重要性を指摘した。近代化とともにケアの分野を女性が無償で担うようになり、その結果としてケアの価値が次第に希薄になっていった。女性が無償で担ったがゆえに、ケアが社会の中で私事として扱われ、ケアそのものが重要視されてこなかった。そのようなことが少子化にもつながっており、さらに大きく見れば、近代化の過程でケアの価値、すなわち「慈しむ」ということが失われた結果として気候変動や深刻な環境問題にも結びついていると感じている。

この点は、喫緊の課題であり、25年という時間軸よりは、私たちが今ここに集中しなければどうなるのだという切迫した状況になっている。そう考えた時に、もう少し強いメッセージとして伝えられれば良かったのではないかという思いがある。つまり、日に日に高まる気温や海面水面に、私たちは耐えられるのかという危機感をより実感をもって共有すべきだったのではないか。ここで述べるべきことではないのかもしれないが、私自身はそうように感じた。以上が1点目である。

2点目は、宗田会長がおっしゃったように、ルビについてである。先にケアについて述べたが、本来、ケアには配慮や共感という倫理・価値が内包されていて、ケアが重視されているのならば、思いやりや共感性のようなものが文章から感じられるはずではないかと思った。そうした意味で、ルビを振って、子どもたちなどにも読めるようするというような感覚は非常に重要だと思う。

この構想の文章は、品位があり、格調高く、すばらしい。このような格調高い文章は、京都らしく、京都のリアリティだと感じる。一方で、共感性も同様に重要である。すべての人が取り残されることなく、これを共有しているという感覚である。やさしい版の作成も検討されているが、この文章に関しては「難しい」といったパブリック・コメントが多かったように思う。そうした反応は昨今の各国政治のポピュリズム台頭の背景とどこか通じるものを想起させるが、高尚な語り口が、読み手との距離を生んでいるように感じ、懸念を覚えた。だから、何か補完的にやさしい版を作るなど、共感性、包摂性を示していくことが肝要ではないかと思った。

最後は細かな点で恐縮だが、第五章5段落目の「進学・就職・育児等による転出後も」という表現に違和感を覚えた。通常、転出の契機として進学、就職、結婚等のライフイベントが該当すると思うが、育児は日常的な営みである。つまり転出のきっかけとしては、むしろ家族形成、つまり結婚などの方が一般的ではないだろうか。そうではなく、育児のために市を転出するのか、とやや引かかった。もし、そうしたことが本市において一般的な転出の契機になっているのだとすれば、悲しい状況に思えた。

野村特別委員

事務局と事実確認したい。私も子どもが2歳3か月なので十二分にあり得るのが現状だとは感じている。これは京都市に限った話ではなく、単純に生活コ

ストが高い、もっと自然の中が良い、など一般的な理由による。いずれにしても、事務局と確認する。

榊田委員

市長就任後、松井市長が最上位にあたる長期的な京都のビジョンを、このような形でまとめ上げたことは良かったと思う。物質的な価値に重きを置くような基本構想ではなく、スピリチュアルな京都らしさを大切にしていけることが25年先の描く京都であるべきだという考え方に対しても評価ができる。

基本構想の中で述べていることをあえて3つのことで表現すると、1つは、堀場委員のおっしゃるように「ほんまもん」ということ。本物の表現にあるように、京都の価値は数字には必ずしも表れない。そのような価値が大切なのだということを、文脈の中にしっかりと表現されている。本物やオンリーワンなど、そのような表現からこれ自身が京都らしさになることが1つである。

2つ目は、しっかりとした社会の調和を重視するということ。このようなものが京都らしさである。基本構想には、社会の中で自分だけが良いのではなく、三方良しの考え方に通じているような考え方が表現されている。

そして3つ目が、中長期的な目線で見た時に、京都の人というのは大切さを時間軸で測る、長期な時間軸を大切にすること。このことが、いわゆる懐の深さ部分である。このような3つの観点が表現されているように思う。

ただ一方で、当初から申し上げているし、前回も申し上げたように難しいし、読みづらい。序章としてはこれでいいが、一般の人がこれだけを読んで未来の京都を思い描くには無理がある。これはあくまでも基本構想であって、これに続いてビジョンを具現化する施策につながるようなものが必要だと強く感じた。具体的には全てをKPIで示すような、数字で表すようなものは必要ないと思うが、この中に書かれている延長線上にあるものだと思う。少子化を前提とした社会における人と人とのつながり。つまり、心でつながる、行間でつながるコミュニティをどのように京都としてつくっていくのかということに対する対策。あるいは、いわゆるSDGsやソーシャルグッドな社会、環境問題を含めたソーシャルグッドな地域コミュニティをつくるのに、ビジョンとしてどのように具体的に京都らしくなっていくのかということ。あるいは産業でいくと、産業活性化。つまりイノベーションがもっと起こっていくような産業的、構造的な工夫、企業との連携、オープンイノベーションといわれるようなものをどのようにジャッジしていくのか。

このような、例えば分野別に書かれたことに対して、具体的な取組の方向性など、次の基本構想の下に来るものとして何かつくっていかないと市民レベルでは未来をしっかりと思い描くことが難しい。概念的には思い描けるが、これからの25年、つまり人口が140万人から120万人ぐらいまで京都市民がダウンサイズしていく中においても、豊かさを感じられる。しかも、クリエイティブ都市といわれる魅力あるまちに、人が集まってくる。この基本的な京都の外せない部分については、25年後も続いているということをしかりと市

民が自信を持って、市民であることに誇りを持てるような基本構想にしたいと思う。ぜひとも、より掘り下げて作っていただければと思った。

宗田会長

まず基本構想の部分で市民の誇りや市民のあるべき姿をきちんと謳っている。そのうえでクリエイティブも欲しい、あるいは市民がクリエイティブを維持しつつ、また世界の注目を浴びるような具体化に向けた取組はすぐ必要だという御意見であった。

阪部委員

野村特別委員はじめ、事務局の皆様、ここまでまとめていただいて改めて感謝する。

私から2点ほどお伝えしたい。一つは、0.1市民のところをよく取り込んでいただき、大変うれしく思う。私のような京都市に住民票を置いていないような者でも自分事として関われる、うれしく思えるような文章になっていると感じた。そこに関連して、第五章第6段落について、変えてほしいという意味ではなく、何かそこだけが他の部分と違うと感じたのが、「京都市と関わり続けていける仕組みをデジタル技術も活用しながら構築していくとともに」という部分である。ここだけ具体的にこのようなことをやると書かれている印象があって、実際に広い意味で人を巻き込んでいこうとすると、現実問題はデジタル技術を使うことになるのではないかと思う。それに対して特に異議があるわけではないが、全体の流れでここが少し浮いて見えたように感じたので、その点だけお伝えできたらと思う。

もう一つは、第五章についてで、こちらは感想だが、支え合いや違いを尊重し合えるなど取り込んでいただいて、非常に良い文章だと思いながら読ませていただいた。支え合いや、違いを尊重し合える部分は京都らしさが伝わる、良い書きぶりにしていただいたと感じた。

野村特別委員

デジタルの話は、実はこの構想全体ではあまり触れられていなかったため、ここが最もはまるだろうと思って書いた経緯があった。民主主義の価値も変わっていくであろうところ、残すかどうかは検討したい。

杉田委員

事務局の皆様、野村特別委員、そして委員の皆様、今まで本当にお疲れ様であった。最後までよろしく願います。私自身もこの議論の場に入れていただき、本当に多くの学びがあった。私からは内容に関する細かい部分での修正依頼はないが、コメントをさせていただければと思う。

1点目は、パブリック・コメントで印象に残ったものだが、「自治体の計画や構想という類いは、行政がアリバイ的に書くものだと思っていたが、これは

なかなかおもしろい」というコメントがあった。くすりと笑いながら見てしまったが、この文章がこのようなオープンな場で作られたこと、そしてこの文書とともにプロセスも含めて、ぜひオープンに公開していただければというところと、市民がつくるのだということ。行政がアリバイ的にこのようなものを作っているわけではないということを、今後も共通認識として持てたら良いなど、このパブリック・コメントで改めて思った。「アリバイ的に」という言葉が、少しおもしろいと思いながら読んでいた。

2点目は、パブリック・コメントが全体的に若者層の回答率が高いことが良い。大学や高校に出前パブリック・コメントをされていたという経緯もあると思うが、多くの10代が実際に読んで、回答されたというところはかなりの成果であったと思っている。一方で、本日も未来共創チーム会議のメンバーに何人か来ていただいているが、やはり最後まで解せなかったのが未来共創チーム会議とこの審議会が分かれてしまっていたことである。連携はしていたけれども、同じ場ではなかったところが残念だったと思っている。これからの25年を考えていくという意味で、未来共創チーム会議は大体24、25歳から35歳のメンバーで構成されていた。これからの未来のまさに担い手である私たちが議論の中心の場にいなかったところが残念であり、例えば、審議会に20代や10代がいれば、また違った議論ができたのではないかと考えながら本日を迎えている。

宗田会長

未来共創チーム会議から提出された、「これからの25年、京都のまちづくりに当たって大切にしたい思想・価値観」を毎回持って、ずっと読ませていただいている。第2回の審議会で御一緒する機会もあり、本日も来ていただいているので、また何かフィードバック等いただければと思う。

それからアリバイに関しては、政治的アリバイや文化的アリバイなどといわれるが、京都市の場合はどうだろうか。市民と一緒にこの基本構想を作ること、あるいは基本計画を作ことは今までもいろいろな形でチャレンジをしてきたが、今回のパブリック・コメントで御協力いただいた市民の皆様のおかげで、本当に市民の皆様の声をこうして最後まで基本構想の文章に入れることができたので、市民と一緒に作ったものだととても強く感じている。

鈴鹿委員

ここまで形にさせていただいたことに、野村特別委員をはじめ皆様に感謝申し上げます。これまでこの審議会で議論したことがかなり盛り込まれているというのが感想であり、具体的にここを変えてほしいというところがあるわけではないが、少し気になる細かい点を言わせていただく。

まず、先ほどから挙がっているルビについてだが、ルビを振る基準があるのかと思う。ルビがあった方が小学生などにとって読みやすくなるのは当然だが、例えば、「間（あいだ）」や「生（せい）」など、小学生でも読めるのではない

かという単語にも振ってあるのが少し気になったので、必要ないところは省いても良いと思う。また、そうでありながら、小学生には難しい漢字だが私たちは読めるというものには付けないのであれば、思い切って、ルビあり版となし版に分けてしまっても良いのではないだろうか。

同じような細かいところでパブリック・コメントにも書いてあったが、注釈が結構多く、確かに読んでいていちいち注釈と照らし合わせるのが難しいという気がするが、一方で注釈がないと分かりづらいので、実際に冊子になる時にうまく工夫した方が良いのではないかと思った。

それから、これはパブリック・コメントでも気になったところで書かれていたのが、結局これを読んで京都市民はどうすれば良いのかが分からなかった。すべて読んでいくと、このようなことを思って生きていけば良いということは分かるが、もし可能であれば未来への問いかけに、「京都市民の在り方を世界とともに不断に問い続けていく」とある部分を、「問い続けて、そして、これに沿って自分の生活を続けていく」など、「問い続ける」で終わると少し放り出された気がしてしまう人もいるのかなと思ったため、生活の方にもっと寄せても良いのかと思った。

これらのことは今から変えてほしいというわけではないが、この構想を出す時に、例えば、「一緒にこれを読んで、自分の生活してもらいたいと思っている」という文章を添えて、公表するのが良いと思う。構想を世の中に出す時の方法が結構大事になってくるだろう。パブリック・コメントの設問にも、どのように伝えていけば良いか、どういう場所を出していけば良いのかという質問があったと思うが、ではこれを読んでどうすれば良いか。また、一部の意見で、「現行の京都市基本構想についてのフィードバックがない」という意見もあったため、「京都市基本構想があって、今、この辺りは随分実現してきたが、この部分はだいぶ変わってきたと思う」というようなことを何か見せる場があれば本当は良いと思った。

細かいことだが、全体的にすごく格調高い言葉を使っているというのは、基本構想としての京都のイメージに合っていると思うので、その辺りのバランスの取り方は難しいかもしれないが、公表する時の注意点かと思う。

宗田会長

この基本構想が完成した後、どういった形で市民とキャッチボールをするか。今発言のあったように、これを読んだ京都市民が次にどういう行動を取れば良いか、どういう気持ちを持てば良いかということを、一緒に考えていくものだと思う。いずれにしろその伝え方が重要である。

高屋委員

この審議会に参加させていただき、本当に良い勉強をさせていただいた。私は本当にべたべたな市民だと思っている。実際問題として、この文書を持ち帰って皆に説明することになったら非常に難しいと思うので、皆様方の御意見で

出ていたように、要約版と言うと失礼だが、もう少し我々が説明できるようなものを作っていただくとうれしく思う。

細かいことで1つだけお願いしたかったのは、第五章の「わたしたち京都市民のこれから」について、ページが長いので少し分けていただくような方策を取ってもらえると、もう少し分かりやすくなるのではないかということ。第五章の中でもある程度話が分かれているところがあるので、3つか4つぐらいに簡単に分けていただくと、説得力が出るのではないか。他の章では、1ページにわたるような長いところは多分ないと思うので、できれば分けていただけたらうれしい。何度も申し上げたように、内容を変えてほしいのではなく、少し分けてもらえたらという意見である。

原委員

私も皆様と同様に、このような貴重な場に参加させていただいたことに改めて感謝を申し上げたい。

私には「働く」という目線からの意見を期待されていると思っている。いろいろな立場の人が論議をしてつくられた構想を、労働者や生活者にしっかりと伝えて、京都で働きたい、働きたい、自分はそこに住みたいということにつながれば良いと期待している。

また、会社で働くだけではなく、起業家の方も京都で企業を起こしたいと思っただけであれば幸いである。

プラー委員

このような審議会に参加させていただき、非常に良い機会をいただいた。委員の皆様、パブリック・コメントに御協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

振り仮名がたくさん増えたことは大変うれしく思う。やはりいろいろな人に見てもらおうという意味では、少し難しい漢字などに振り仮名を振っていただくことで読みやすくなる。

それから、パブリック・コメントの中でもたくさんコメントがあったように、やはり難しい文章である。難しい文章であること自体に全く問題はないと思っているが、特に学生や若者、子ども、外国人に理解してもらう際には工夫が必要である。やさしい日本語で書かれている文書もあるが、やさしすぎると感じる場面が多々ある。異なるバージョンを作るのであれば、やさしい日本語にするのではなく、文字数が増えたとしても丁寧に説明することが必要である。

例えば、「京都学藝衆」という言葉も、AIや辞書などで調べても出てこないし、意味がよく分からないと思う。そのようなものに丁寧に説明を加えていくとさらによい取組になる。せっかく京都にたくさんの留学生が来られているので、留学生の人たちが京都に滞在している間に、このような考え方を学んで理解してもらい、自分の国に帰って、京都はこのような考え方を持っているのだと伝えてもらうことで、京都のファンが増えることなるし、今京都に住んでいる住民たちも基本構想を理解することによって、京都市が何をやりたいのか、

これからどういうところに向かっていくのかということも理解できているので、今後そのように期待したい。

牧委員

大変格調高い文章をおまとめいただいた野村特別委員、そして事務局にまずは感謝を申し上げたい。この基本構想をどう使うのかということだが、先日、京都市のある委員会でこれを配って、我々が担当する分野についてはここに書いてあるという、昔ながらの基本計画的な説明も書いていたので、基本構想に京都市がやるべきことが書いてあるという面での使われ方というのも、漏れなくできているのかと思った。

今回修正したことによって、少し文意が分かりにくくなった部分が3箇所ある。1点目は、第一章第三節第2段落の「気候変動や自然災害の激甚化」である。細かいが、これは「気候変動の深刻化」でも良いだろう。

2点目は、第三章第三節第3段落の「地球環境での環境問題の影響は」という部分に関して、環境問題の影響はやはり付随的な現象だと思う。そして、ここに書いてある「山麓部への都市域拡大、山間地域の過疎高齢化」は社会的な現象であるような気がして、この辺りは何か文章を少しだけ足せば良い。

3点目は、第四章第二節(2)について、レジリエンスということを「粘り強さとしなやかさ」と書いていると思うが、柳のように風に吹かれても、さらに元に戻っていくということなので、「しなやかさ」だけでも良い気がする。粘り強さをレジリエンスと訳されている時もあるが、わざわざ足さなくても良いと思った。

安保副会長

第1回審議会がここで開かれた時に、一定の字数制限がある中で京都を表す基本構想を本当に作れるのであろうかと少し心配になったり、ワクワクしたりしたことを思い出した。審議会委員の皆様と、そして最後に市民の方から建設的で本当によく考えられたパブリック・コメントをいただき、市民の方と一緒に作り上げられたのはすばらしいことである。今回が第8回になるが、この歩みはなかなか大変だったと振り返り、野村特別委員をはじめ、審議会、それから事務局の方々の御苦勞を思うと、本当に感謝したい。

最後に、ルビに関して、審議会として決めるのも良いが、子どもたちに配慮するのであれば、子どもたち自身でルビを振ってもらった方が良いと思う。これは本当に余白や間があり、それぞれの人生に基づく解釈を許す基本構想だとも思うので、大人の勝手に振るよりは子どもたちがこれを読んで子どもたち版を作る時にルビを振って、難しい言葉は自分たちで解説も入れたら良い。他にも、視覚障害のある方で漢字が読めないと難しい言葉を理解できないと思うので、視覚障害の方が理解しやすいように、視覚障害の方にこの基本構想を読んでいただいて、その意味を忠実に表せるような視覚障害のある方版を作ったり、英語を母国語とする方のものを作ったりするなど、基本となるものはこれで確

定していただき、あとはいろいろなものを許すというか、深い懷の中でできれば良いと思う。漫画版が出て良いし、そのような理解の深め方を許すものであってほしいと思う。

宗田会長

冒頭に申し上げたとおり、今回は最後の審議会になるので、本日いただいた御意見、修正案については、会長、副会長、野村特別委員に御一任いただくことを最後にお断り申し上げて終了させていただく。進行を事務局にお返しする。

西田経営戦略監

宗田会長、委員の皆様、本当に長時間にわたり、最後の最後まで貴重な御意見を賜り、感謝申し上げます。文章表現をどうするか、ルビをどうするか、概要版や外国版をどのように作っていくか、この構想を基にした施策をどのように進めていくかなど、事務局として、引き続きしっかり知恵を絞りたいと思う。表現については、野村特別委員に相談させていただき、会長・副会長とも協議させていただきながら、最終版としてまとめていきたい。昨年の10月からおよそ1年間にわたり、熱心に御議論いただいた。3時間を超えるような回もあり、事務局として至らなかった部分も多々あったと思うが、この場をお借りして、深くお詫び申し上げます。

9月11日に、宗田会長、安保副会長、曾我副会長、野村特別委員から答申をいただく予定である。その後、京都市会において議論させていただき、年内の策定を目指していく。こうして皆様に議論していただいたことを最終的に京都基本構想としてまとめ、より多くの方に共感していただき、拠り所としていただけるように、事務局としても引き続き尽くしていきたいと思う。

それでは、最後に、松井市長から一言お願いする。

松井市長

本日も含めて皆様に貴重な御意見をいただき、改めて感謝申し上げます。この種の文章は、推敲を重ねていくことで良くなる部分と、本日の議論にもあったように、概念を追加していくと若干混濁したり、少し付け足した部分の文体が不統一になってしまったりする部分もある。本日も本質的な御指摘をいくつもいただいたので、最後の最後までできるだけ皆様の御意向を踏まえて推敲できるように努めたい。それが1点目である。

2点目は、ルビについて多くの御意見をいただいた。これは野村特別委員の御意向を含めて、声に出して読んでもらう時にこう読んでもらいたいという意図があったと思う。だから、「間」を「あいだ」と読むのか「かん」と読むのか、「今日」を「きょう」と読むのか「こんにち」と読むのか。そのような単語についてもあえてルビを振られたのは、声に出して読む日本語としてどのようなものを求めるのかという意味もあったと思う。その辺りも含めて、どのようにルビを振るのかということは、本日の御議論も踏まえて統一感のあるもの

にしたい。あるいは、ここまでは統一するが、先ほど安保副会長がおっしゃったように、むしろそこから先は御自身で振っていただくようにしても良いかもしれないし、バージョンを分けることも一つであると思っている。

それから、最終的に問いかけで終わるというのは、正解を求める人からすると、ではどうしたら良いのかとなるが、それを考えるのもあなた方の仕事だという意味で、あえて問いかけにしている。最後はどのような表現で締めるのかということは、大事な指摘だと思う。あえて最後に問いかける形で終わるのも一つのやり方だと思う。そのことも含めて、これを受け取った人間として、どのように動くかということが、私に突き付けられている。曾我副会長から最も本質的な御指摘をいただいたが、基本構想と基本計画的な部分との対応に関しては、重い宿題を受け取ったと思っている。地方自治の現実を言うと、元々地方自治体の首長は非常にさばけた言い方で言うと、ある程度の期間をやって、それを基本計画でつなげていくのが従来の発想であったと思う。そのような部分も必要だと思う。この25年の、場合によっては曾我副会長がおっしゃったように25年を超えたような価値が入っているのではないかな。それに対して、行政が5年や10年という単位でどういった施策を展開していくかということ、どのようにまとまった形で有権者である市民に問いかけていくのか。あるいは、有権者以外の京都のステークホルダーである京都愛を持っている方々に、どのように問いかけていくのか。新京都戦略をいつも皆様にはお届けしているが、私の任期があと2年半しかない中でできることと、そこではさすがに収まらないがこの理念的な基本構想を踏まえて、市長として京都市役所として、分野別計画以外に中期的なプランを問いかけていくのかは宿題だと思っている。そのことを含めて、これからこの基本構想を私は私なりに解釈して、この構想を用いてどう行政を進めるかと市民に問いかけなければいけない。また、各委員のそれぞれのフィールドにおかれても、この基本構想を皆様の周辺でどのように問いかけていくのか。そして、京都市政にもフィードバックをいただきたいと思う。

本当に長期間、御議論にお付き合いいただいた。これは、審議会委員の皆様だけではなく、今日傍聴に来ていただいている未来共創チーム会議の皆様、それからスタッフとして支えていただいた市役所職員、いろいろな形でスタッフとしてお支えいただいた方々、あるいは団体の事務局としてお支えいただいた方々、そして傍聴に何度も来ていただいている方々、あるいは議論の記録を見ていろいろ御意見を継続的にいただいた方にも感謝を申し上げる。会長・副会長、そして執筆者である野村特別委員、事務局を含めて、皆様は一任をされるということなので、私も多少なりとも参加させていただき、その後はある意味では十字架を背負うような覚悟で受け止めたい。大変たくさんの貴重な御意見を賜ったことに改めて感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

(3) 事務連絡

司会（都市経営戦略監）

それでは、以上をもって第８回京都市総合計画審議会を閉会する。

３ 閉会

(以上)